

東京大学大学院教育学研究科・学校教育高度化センター
シンポジウム(2012年9月29日:東京大学福武ホール)

地方発のカリキュラム開発 —教育課程特例校を事例に—

大桃 敏行(学校開発政策コース)

村上 純一(学校開発政策コース)

行政班研究グループ構成

- 大桃 敏行 (東京大学)
- 押田 貴久 (宮崎大学)
- 仲田 康一 (浜松大学)
- 武井 哲郎 (びわこ成蹊スポーツ大学)
- 村上 純一 (日本学術振興会特別研究員／
東京大学大学院生)
- 梅澤 希恵 (東京大学大学院生)
- 町支 大祐 (東京大学大学院生)
- 木場 裕紀 (東京大学大学院生)
- 讃井 康智 (東京大学大学院生)

学会発表

- 押田貴久・仲田康一・大桃敏行「自治体独自のカリキュラム開発—教育課程特例校に焦点を当てて—」日本教育政策学会第19回大会(東京学芸大学)2012年7月7日
- 村上純一・梅澤希恵・武井哲郎・町支大祐「地域文化を活かした自治体独自のカリキュラム開発—宇土市と諏訪市を事例として—」日本教育政策学会第19回大会(東京学芸大学)2012年7月7日
- 梅澤希恵・木場裕紀・讃井康智・町支大祐・仲田康一・押田貴久・武井哲郎・村上純一・大桃敏行「自治体独自カリキュラムの実施に対する校長・教員の認識—教育課程特例校への質問紙調査から—」日本教育学会第71回大会(名古屋大学)2012年8月26日

行政改革

- 分権改革

 - 地方分権の推進(国から地方へ)

 - 学校の自主性・自立性の確立(行政から学校へ)

- 規制改革

 - 事前規制から事後規制へ

 - 参入規制の緩和、供給主体の多様化、供給主体間の競争、成果の評価(結果に対するアカウンタビリティ)

 - 成果の重視

教育課程特例校とは

- 「学校教育法施行規則第55条の2等に基づき、学校又は地域の特色を生かし、学習指導要領等によらない特別の教育課程を編成し実施することができる学校」(文部科学省「教育課程特例校の指定に係る申請手続等について」(2012年7月6日))
- 2003年「構造改革特別区域研究開発学校」→2008年「教育課程特例校」
- 指定状況(2012年4月1日現在)
指定件数:206件、指定学校数2,591校(国立7校、公立2,546校、私立38校)(2011年4月1日現在の指定件数:180件、指定学校数:2,511校)(文部科学省HP)

明らかにしたいこと

- 地方発のカリキュラム開発:仕掛け人は誰か。
- カリキュラム開発はどのように行われているか。
- その内容は如何なるものか。
- 学校・教員はその実施にあたって行政のどのような支援を期待しているのか。
- どのような成果や課題が認識されているのか。
- 成果や課題の認識において教科の内容により相違があるのか。
などなど……

研究の方法（１）

- 訪問調査

聞き取り、資料収集、授業参観

2011年度：

東京都世田谷区、石川県金沢市、富山県
高岡市、長野県諏訪市、熊本県宇土市、
熊本県産山村

研究の方法（２）

○ 質問紙調査(2011年度)

教育委員会：

教育課程特例校制度を実施している全教育委員会

学校・教員：

「英語教育」は10%を無作為抽出(ただし所管学校が2～9校の自治体においては2校を抽出)、「英語教育以外」は2/3を無作為抽出(ただし所管学校が20校までの自治体においては全校、政令指定都市においては50校を抽出)

教委票：65／134→48.5%、学校票：327／809→40.3%、

教員票：1361／4045→33.6%

(岩手、宮城、福島の3県は対象とせず)

事例Ⅰ 世田谷区「日本語科」(1)

○ 導入

発案者:教育長

2003年度:「美しい日本語を世田谷の学校から」の取り組み

2004年度:世田谷「日本語」教育特区として認定

2007年度:区立全小中学校で展開

○ 開発・実施

検討委員会の設置:基本方針の検討。作業部会の設置:教科書の作成。教育委員会事務局:指導案の作成→モデル授業の実施。各学校での実践→指導事例集の作成と配布。

事例Ⅰ 世田谷区「日本語科」(2)

○ 目的

①深く考える子どもを育てる、②自分を表現することができ、コミュニケーションができる子どもを育てる、③日本の文化を理解し大切に、継承・発展させることのできる子どもを育てる。

(中学校)

深く考える能力・態度を育成することを中心とする「哲学」領域／自己の考えや思いを表現し、コミュニケーション能力を育成することを中心とする「表現」領域／日本文化を理解し、継承しようとする態度を育成することを中心とする「日本文化」領域

事例Ⅰ 世田谷区「日本語科」(3)

○ 教科書

小学校:低学年用・中学年用・高学年用

中学校:哲学・表現・日本文化

○ 授業時数

小学校:週1時間(1・2年:生活、3～6年:総合的な学習の時間)

中学校:週2時間(選択教科or総合的な学習の時間)

○ 学習指導要領の改訂による見直し

総合的な学習の時間:時数削減、選択教科:「できる」に。→中学校「日本語」:週1時間に(「必修」と「発展」)。

日本語 3・4年 目次

日本語 三・四年 目次

三年

日本語の響きやリズムを楽しもう〈1〉詩 10 竹 たけ 萩原 朔太郎 はぎわら せつたろう

■ことばつておもしろい 12

日本語の響きやリズムを楽しもう〈2〉漢詩 14 江南の春 こうなんの はる 杜 牧 と ぼく

日本語の響きやリズムを楽しもう〈3〉俳句 15

■温かい気持ちを伝えることば 16 心を映すことば こころをうつすことば 斎藤 茂太 さいとう けいた

■世田谷区の地名の由来 18

■世田谷区の郷土カルタ 20

日本語の響きやリズムを楽しもう〈4〉漢詩 22 客中初夏 かくちゅうしゅが 司馬光 しばひかり

日本語の響きやリズムを楽しもう〈5〉詩 23 夏は来ぬ なつはきぬ 佐佐木 信綱 ささき しのぶ

日本語の響きやリズムを楽しもう〈6〉漢詩 24 秋風の引 あきかぜのひ 劉禹錫 りゅううしやく

日本語の響きやリズムを楽しもう〈7〉論語 25 独り敬亭山に坐す ひとりけいていざんにざす 李白 り ばい

■日本の四季・年中行事 26

日本語の響きやリズムを楽しもう〈8〉俳句 32

日本語の響きやリズムを楽しもう〈9〉詩 33

日本語の響きやリズムを楽しもう〈10〉漢詩 34 先生山を見る せんせいやまをみる 高村 光太郎 たかむら こうたろう

日本語の響きやリズムを楽しもう〈11〉論語 36 鹿柴 ろくさい 王維 わうい

■一冊の本から 37

童話・ファンタジーの世界について語ろう 38 「エルマーのぼうけん」を読んで 児童作品

■三年のまとめ 40

日本語「哲学」 目次

日本語「哲学」目次

日本語「哲学」の学習

3

哲学 一年

はじめに

10

「考える」って何をすることだろうか？

野矢 茂樹

日本の自然について考える

18

季節を表す言葉

24

美しい日本の私

川端 康成

28

枕草子 木の花は

黒澤 弘光 訳

30

徒然草 自然のなぐさめ

浜野 卓也 訳

生きることにについて考える

32

人間ってすごい

日野原 重明

40

雨ニモマケズ

宮澤 賢治

42

ショートパンツ初体験 イン アメリカ

大日方 邦子

46

忘れ得ぬ節の言葉

小川 誠子

48

傷つけるということ

生徒作品

52

人とのつながり

河合 隼雄

56

周りの人への心遣い

清水 義範

58

心の行儀

沢村 貞子

59

日本の礼儀・世界の礼儀

60

尊敬と感謝の心

山中 典士

礼儀の心について考える

人とかかわりについて考える

事例Ⅱ 産山村「うぶやま学」等（1）

○ 導入

発案者：教育長

2007年度：小学校統合、校舎も中学校校舎と併設

2006年度：産山村小中一貫教育特区として認定

2007年度：小中一貫教育の実施

○ 開発・実施

産山村教育研究会：カリキュラムの開発・研修。

研究会組織（2004年度）：会長（教育長）—研究企画部（指導主事・校長・教頭）—2学期制（評価）・小中一貫教育デザイン評価部会、小中一貫教育・教育課程編制部会、小中一貫教育・指導方法開発部会。

事例Ⅱ 産山村「うぶやま学」等（２）

○ 目的(ねらい)

①子どもたちに確かな学力をつける、②郷土を知り郷土を愛する子どもを育てる、③小学校と中学校の段差を低くして教育効果を上げる、④地域と学校との協力関係を深める学社融合を進め、学校教育の充実とともに地域の教育力を高める。

(新カリキュラムの開発)

「うぶやま学」:地域との連携や地域人材の活用を通じた体験を重視した学習／「ヒゴタイイングリッシュ」:英会話科と英語科／「チャレンジ学習」:基礎的基本的な内容の学習と応用力の育成、「うぶやま検定」や学外検定へのチャレンジ。

事例Ⅱ 産山村「うぶやま学」等（3）

○ 授業時数（2012年度）

	小1	小2	小3	小4	小5	小6	中1	中2	中3
うぶやま学	34	35	35	35	70	35	35	35	35
英会話科	20	20	35	35	35	35	35	35	35
英語科						35			
チャレンジ学習			35	35	35	35	35	35	35

時数確保：生活、外国語活動、総合的な学習の時間、2学期制導入等による授業時数の生み出し。中学校：「うぶやま学」＝総合的な学習の時間

○ 学習指導要領の改訂による見直し

「うぶやま学」「チャレンジ学習」：授業時数の削減

うぶやま学年間指導計画

学年	テーマ		全体活動	時数	学年の活動		
小1	うぶやまで学ぶ (うぶやま探検)	地域 自然	子ども・ジュニアヘルパー活動	34	・外に行こう・葉っぱの色が・冬が来たよ (地域人材等)		
小2					・私の村探検・生き物を飼おう・村の人々 (地域人材等)		
小3	うぶやまを学ぶ (うぶやまの人とくらし)	人とくらし			35	・うぶやま牧場を訪ねよう(牧場職員) ・うぶやま保育園を訪ねよう(園児、職員)	
小4		川				35	・玉来川調査 (河川環境管理財団・環境センター)
小5		森と草原				70	・草原と私たち (環境省自然環境局九州地区自然保護事務所)
小6	うぶやまに学ぶ (うぶやまの 生き方)	福祉	子ども・ジュニアヘルパー活動	35	・お年寄りを訪ねて (社会福祉協議会・ほっと館)		
中1		福祉			30	・うぶやまの福祉 (社会福祉協議会・インターワーク)	
中2	うぶやまは学ぶ (うぶやまと 私たちの未来)	産業	子ども・ジュニアヘルパー活動	70	・産山で働く ・産山と沖縄 (各事業所)		
中3		未来			95	・自分の道を探そう(保護者・卒業生) ・生き方を見つめ、一流の田舎づくり	

(産山村教育委員会提供)

事例Ⅲ 諏訪市 「相手意識に立つものづくり科」(1)

○ 導入

発案:教育委員会が中心

2003年度:「地域密着型ものづくり講座」発足

2005年度:「ユーザー視点のものづくり」開始

(経済産業省のキャリア教育モデル事業)

2008年度:特区「相手意識に立つものづくり科」

○ 開発・実施

「ものづくり推進協議会」(2004年度):諏訪のものづくりの理念、基金の活用方法等について議論。「ものづくり委員会」(2008年度~):年間計画の立案、アンケート実施・評価等。

事例Ⅲ 諏訪市 「相手意識に立つものづくり科」(2)

- 目的
 - ・地域の特性を活かしたものづくり学習
(→地域を理解、郷土を愛する気持ちを身に付ける)
 - ・豊かな心情を育てるものづくり学習
(→相手の立場に立って製作することを通して、
他者を温かく思いやれる児童生徒を育成)
 - ・自己の将来を考えさせるものづくり学習
(→発想・企画・構想する力を育成)
- 授業時数:年25時間(小・中学校とも)
- 学習指導要領の改訂による見直し:美術・技術家庭からも時数を充当。

事例Ⅲ 諏訪市 「相手意識に立つものづくり科」 (3)

小学校 教育課程表 (2011年度以降)

区分	各教科の授業時数									道徳の授業時数	特別活動の授業時数	総合的な学習の時間の授業時数	外国語活動の授業時数	相手意識に立つものづくりの時数	総授業時数
	国語	社会	算数	理科	生活	音楽	図画工作	家庭	体育						
第1学年	306		136		87(15)	68	58(10)		102	34	34			25	850
第2学年	315		175		90(15)	70	60(10)		105	35	35			25	910
第3学年	245	70	175	90		60	50(10)		105	35	35	55(15)		25	945
第4学年	245	90	175	105		60	50(10)		105	35	35	55(15)		25	980
第5学年	175	100	175	105		50	40(10)	60	90	35	35	55(15)	35	25	980
第6学年	175	105	175	105		50	40(10)	55	90	35	35	55(15)	35	25	980

(諏訪市教育委員会提供)

事例Ⅲ 諏訪市 「相手意識に立つものづくり科」(4)

中学校 教育課程表 (2012年度以降)

区分	各教科の授業時数									道徳の授業時数	特別活動の授業時数	選択教科等の授業時数	総合的な学習の時間の授業時数	相手意識に立つものづくりの時数	総授業時数
	国語	社会	数学	理科	音楽	美術	保健体育	技術家庭	外国語						
第1学年	140	105	140	105	45	40(5)	105	62(8)	140	35	35		38(12)	25	1015
第2学年	140	105	105	140	35	30(5)	105	62(8)	140	35	35		58(12)	25	1015
第3学年	105	140	140	140	35	30(5)	105	27(8)	140	35	35		58(12)	25	1015

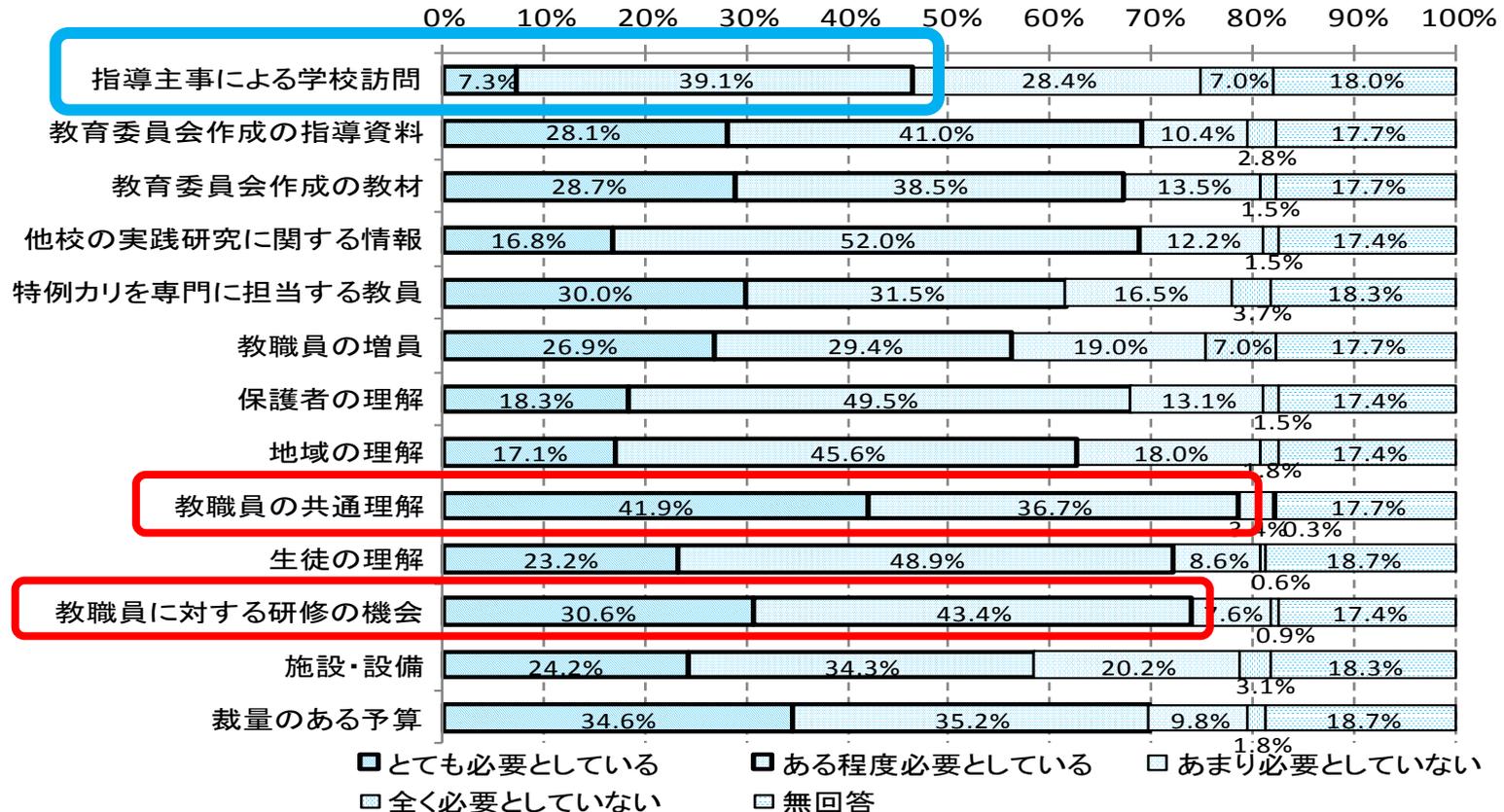
(諏訪市教育委員会提供)

事例Ⅲ 諏訪市 「相手意識に立つものづくり科」(5)

○ 教科の内容

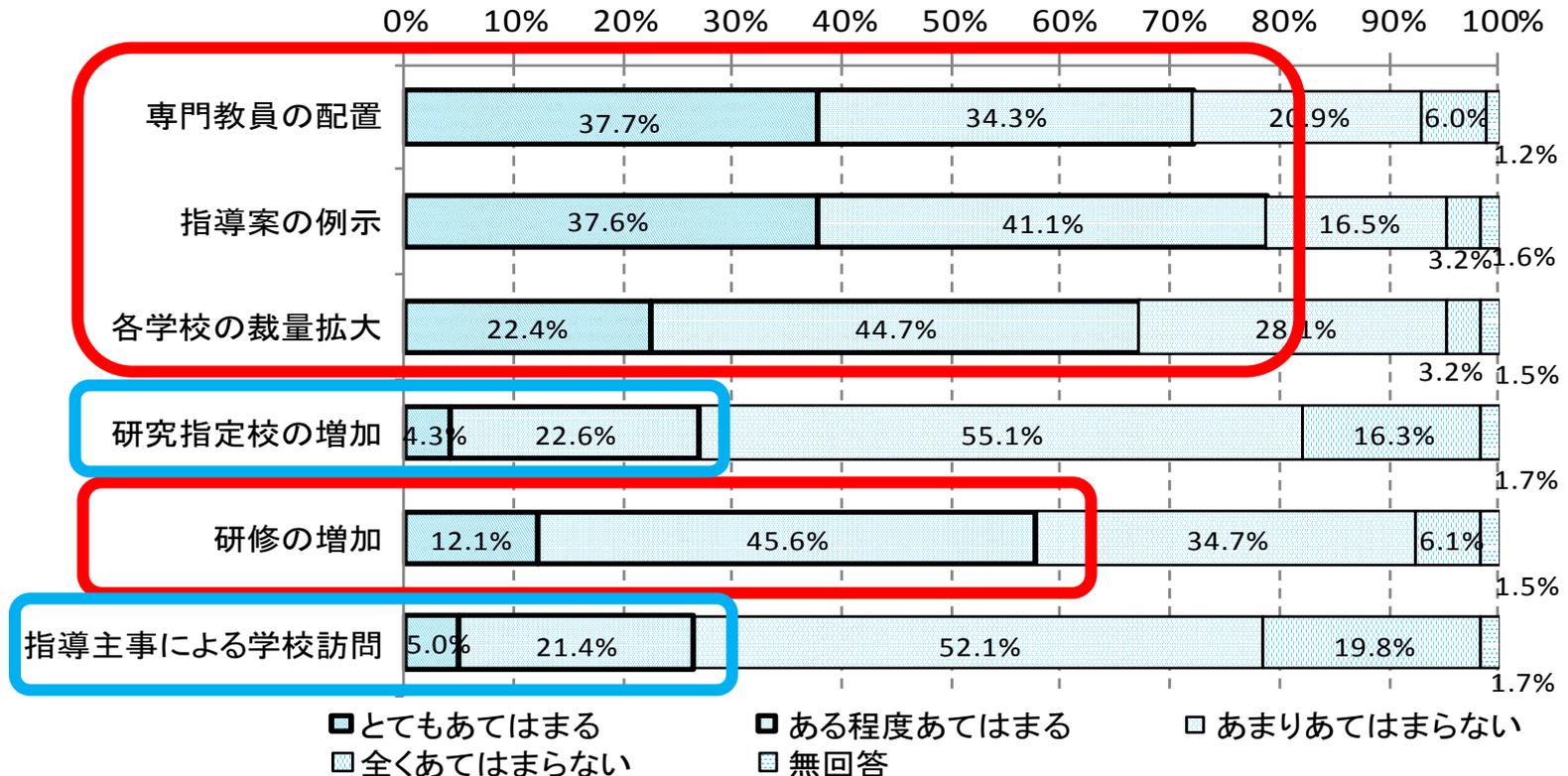
- ・「家族のためのお箸づくり」(小学校3年)、「使う人、置く場所、見る人などを想定した、ガラス片の色や形を用いた室内インテリアづくり」(中学校1年)など。
- ・独自のキット作成など、地元企業からの支援を受けて実施。(地元企業の協力を得るにあたっては、市の経済部商工課とも連携)
- ・保護者・地域住民へのPR機会として「ものづくり作品展」、「チャレンジショップ」などを開催。
- ・作品は「諏訪圏工業メッセ」にも出品。

カリキュラム実施にあたって 学校が求める支援



(これ以降の図表は日本教育学会第71回大会発表資料から転載)

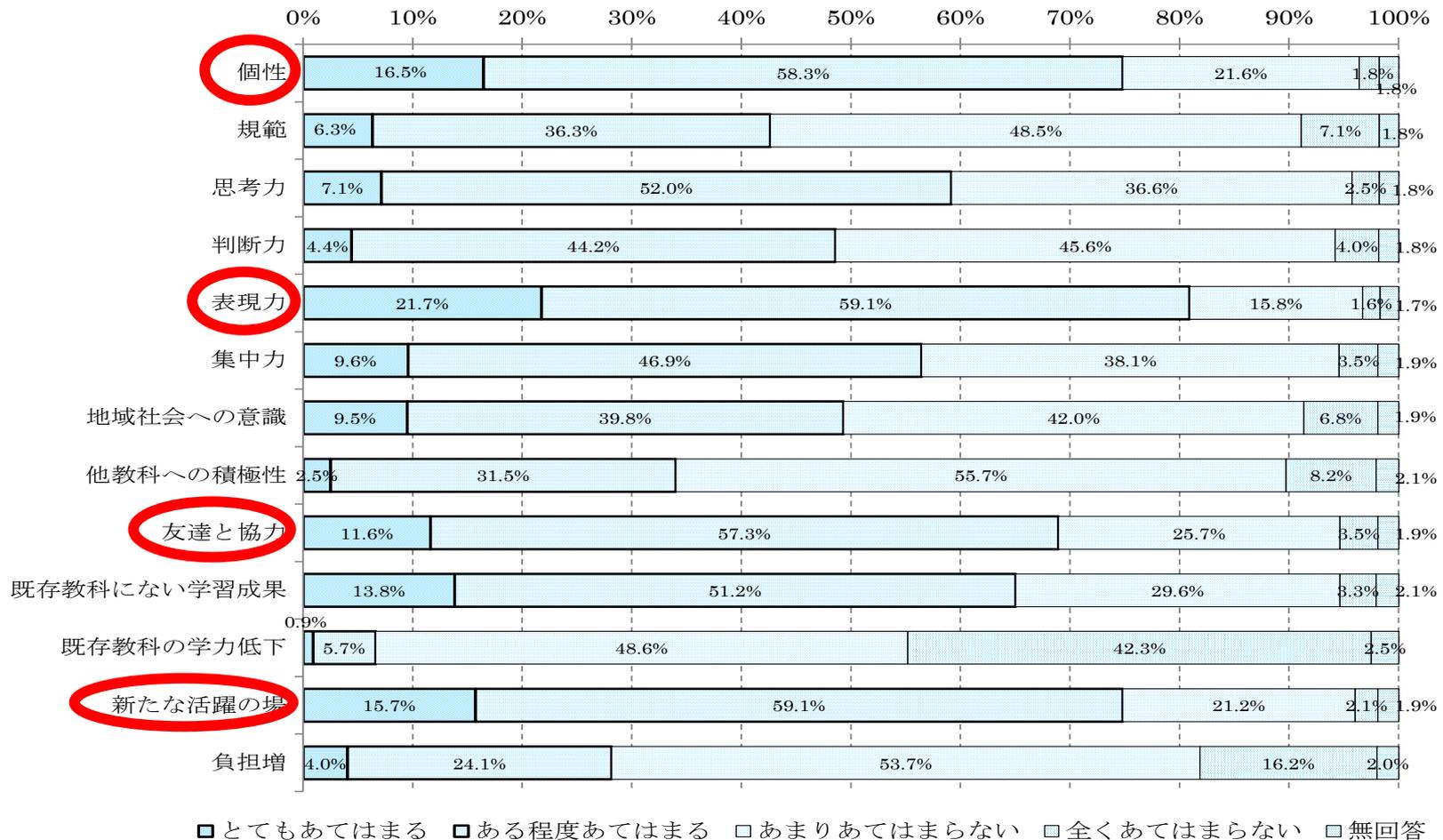
カリキュラム実施にあたって 教員が求める支援



カリキュラム実施にあたって 学校／教員が求める支援

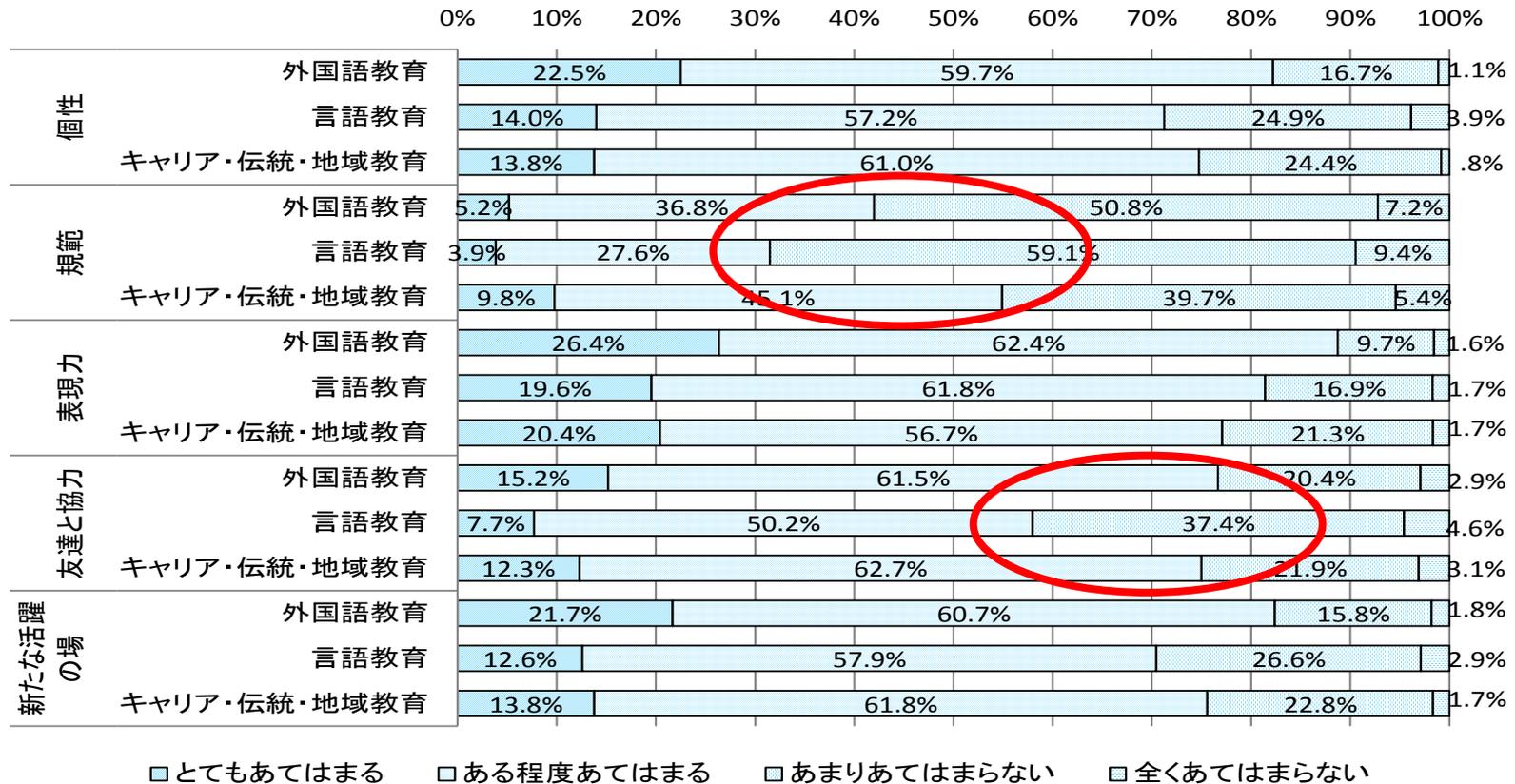
- 教員は「指導案の例示」、「専門教員の配置」、「各学校の裁量拡大」、「研修の増加」を求める傾向がみられる。
- 教員は「研究指定校の増加」や「指導主事による学校訪問」はあまり求めている。
 - ⇒ 参考となる資料の提示や研修機会の充実を求める一方、裁量の拡大も求めている。
- 学校は「教職員の共通理解」、「教職員に対する研修の機会」を重視。
- 「指導主事による学校訪問」は学校としてもあまり求めない傾向。

カリキュラム実施による子どもへの影響

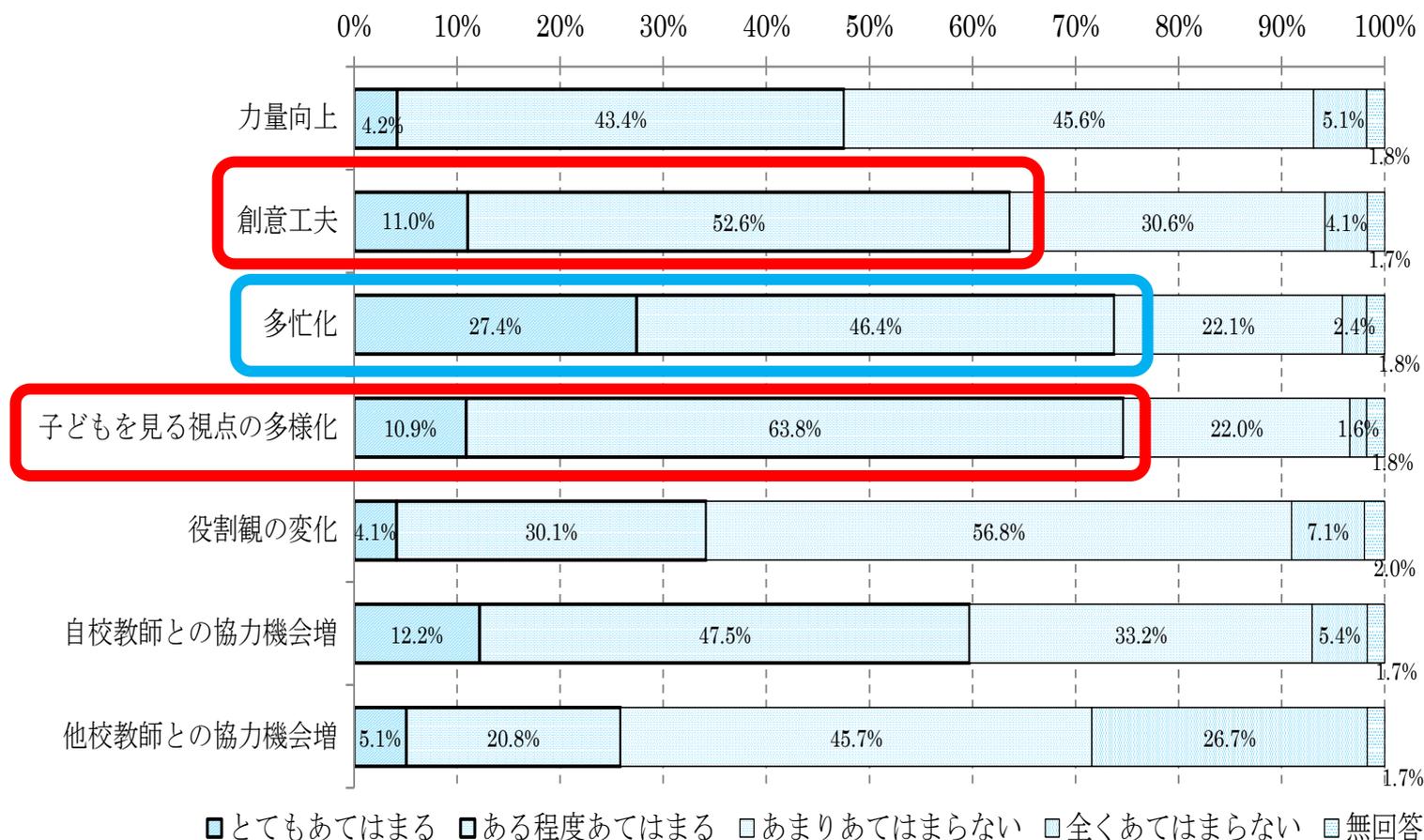


とてもあてはまる
 ある程度あてはまる
 あまりあてはまらない
 全くあてはまらない
 無回答

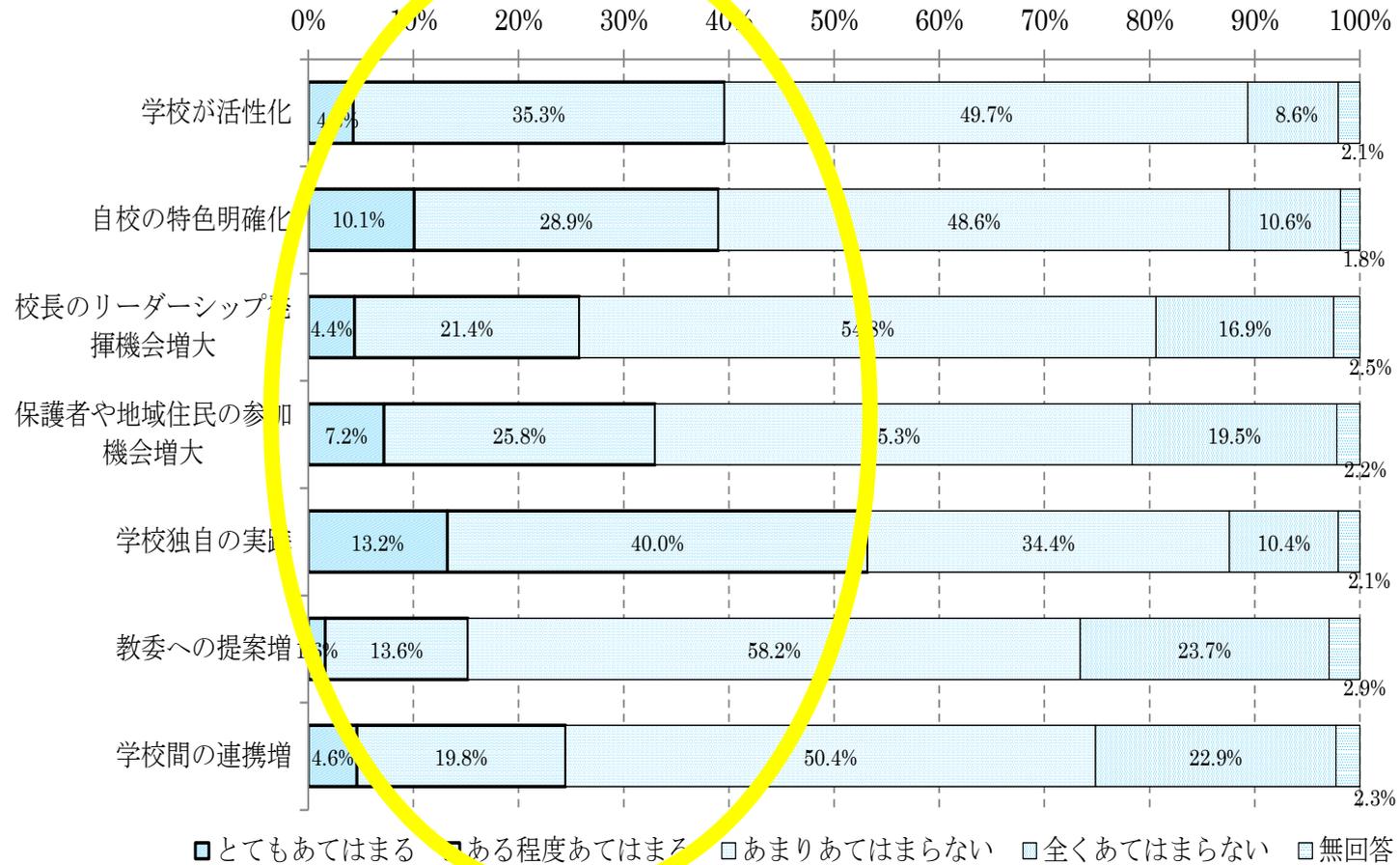
カリキュラム実施による子どもへの影響 (教科内容別)



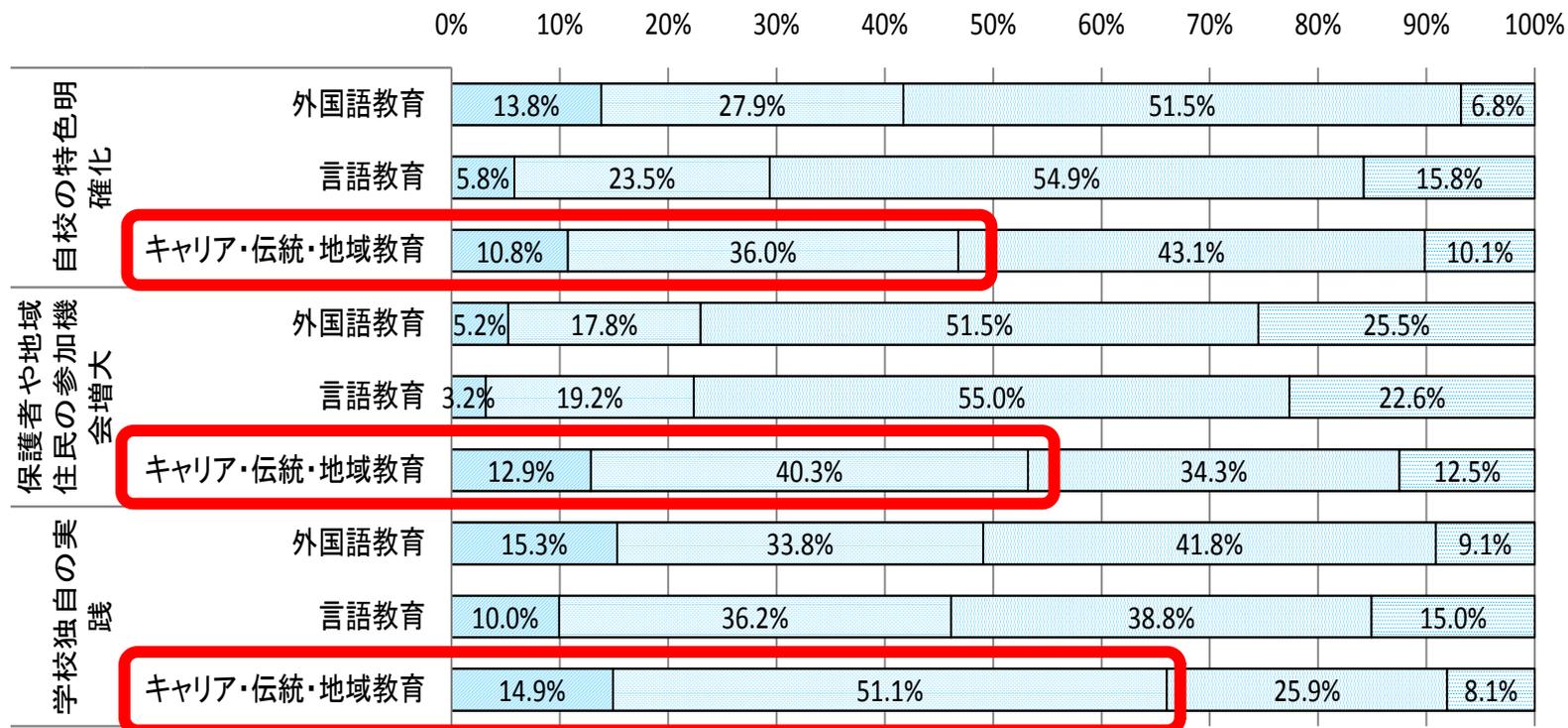
カリキュラム実施による教員自身への影響



カリキュラム実施による学校への影響



カリキュラム実施による学校への影響 (教科内容別)



とてもあてはまる
 ある程度あてはまる
 あまりあてはまらない
 全くあてはまらない

カリキュラム実施による影響・まとめ

◆子どもへの影響

- 子どもの個性や表現力・思考力の向上を教員は感じている。
- 「友達との協力」や「活躍の場面の増加」も。
- 教科の内容により、教員が感じる影響には差がある。

◆教員への影響

- 多忙化を感じる一方、
視野の拡大や創意工夫を活かす機会の増加も感じている。

◆学校への影響

- 学校全体の変化に影響しているという認識は低い。
- 教科の内容によって、教員が感じる「学校への影響」には差がある。